

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K00533

研究課題名(和文)「人間の絶対平等」を目指した金子文子の思想と文学の総合的研究

研究課題名(英文) Comprehensive Research on Fumiko Kaneko's Thought and Literature

研究代表者

安元 隆子 (YASUMOTO, Takako)

日本大学・国際関係学部・研究員

研究者番号：40249272

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：金子文子の自伝『何が私をこうさせたか』を表現に即して丹念に読むことで、裁判のための尋問調書等では知ることのできなかった、性に弱く虚栄心に左右される人間・金子文子を明らかにした。そして、そこに「運命」からの脱却という物語を読んだ。また、当時の山村や朝鮮、東京の状況を明らかにし、金子文子の思想が誕生する必然性を示した。そして、自伝形式と「自然」の治癒力にはルソー、「自我」思想にはシュティルナー、獄中自死の選択にはアルツィバーセフ、短歌制作には石川啄木の影響を認め、それらを検証した。更に、金子文子死後の受容について瀬戸内晴美とキム・ビョラ、映画『朴烈』を取り上げ、金子文子の現代的意味を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来、金子文子は大逆事件を志した大正期の虚無思想の運動家として、または男女関係に拘泥されない朴烈との対等なパートナーシップに注目した女性史の観点からの評価が主であった。しかし、本研究では、自伝を裁判調書と比較し、虚構部分を明らかにし、文学として読むことでその物語性を浮き彫りにした。それによって硬質な思想家とは異なる新たな金子文子像を読み取った。また、時代背景を明らかにし、金子文子の思想の必然性を明らかにした。更に、海外からの哲学思想の影響を具体的に検証し、その国際性も明らかにした。金子文子の死後の受容研究も含め、先行研究にはない詳細、かつ多面的な金子文子像を提示した点に本研究の意義がある。

研究成果の概要(英文)：By carefully reading Fumiko Kaneko's autobiography "What Made Me Do This" in line with the expressions in the book, I have revealed a sexually weak and vain of Fumiko Kaneko, who could not be known from the interrogation reports for the trial. In the book, I read a story of breaking free from "destiny". I also clarified the conditions in mountain villages, Korea, and Tokyo at that time, and showed the inevitability of the birth of Fumiko Kaneko's thought. I also recognized the influence of Rousseau on the autobiographical form and the healing power of "nature", Stirner on the idea of "ego", Arzibarchev on the choice of suicide in prison, and Ishikawa Takuboku on the creation of tanka poems, and examined them. Furthermore, I discussed the posthumous reception of Fumiko Kaneko by Harumi Setouchi, Byora Kim, and the movie "Park Yeol," and examined the contemporary significance of Fumiko Kaneko.

研究分野：日本近代文学、日露比較文学、日露交流史

キーワード：金子文子 『何が私をこうさせたか』 虚無主義 天皇制批判 自伝 シュティルナー アルツィバーセフ ルソー

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

#### 1. 研究開始当初の背景

「人間の絶対平等」を掲げ、天皇制を否定する金子文子の思想と同時に、強靱な思想を持ちながら獄中縊死を選んだ経緯についても関心があった。また、獄中で書いた手記(自伝)は、これまで金子文子を知る上での補助的な役割しか与えられてこなかったが、自立した作品と考え、その文学性を明らかにし、多面的な存在としての金子文子を提示したいと考え、研究を開始した。

#### 2. 研究の目的

- (1) 金子文子の自伝『何が私をこうさせたか』を文学作品として読み、そこからこれまでに抽出されてこなかった金子文子を明らかにする。
- (2) 金子文子の思想とその形成に影響を与えた海外の思想とを比較検討し、金子文子の思想の多様性と国際性を明らかにする。
- (3) 金子文子の死後、どのように「金子文子」が受容されているのかを映像表現を含めて明らかにする。

#### 3. 研究の方法

- (1) 自伝『何が私をこうさせたか』を表現に即して徹底的に読み込み尋問調書と比較検討する。
- (2) 金子文子の思想屹立の必然性を明らかにするために時代背景を再現する。
- (3) 金子文子の思想の内実について、ルソー、シュティルナー、アルツィパーセフらの思想と比較し、文子がどのように血肉化しているのかを明らかにする。
- (4) 金子文子死後の小説における金子文子の受容と共に、映画の視聴者の反応も含めて現代の金子文子受容を明らかにする。

#### 4. 研究成果

##### 【はじめに】

金子文子は1903年、この世に生を受けるも両親の愛情に恵まれたとは言い難く、父・佐伯文一が文子を戸籍に入れなかったため、幼少期は無籍者の悲哀を味わった。1912年に親類に引き取られて朝鮮半島に渡り女中同然の暮らしを強いられ、1919年に帰国。その後、上京して新聞売りや露天商、奉公をしながら苦学し、不条理な現実の中で辛酸を舐めた結果、社会主義を経て無政府主義、虚無思想に傾倒していく。そして、「人間の絶対平等」を阻む天皇制を否定した。1922年、思想的な共感から朝鮮人の朴烈と知り合い同棲するが、関東大震災の際、朴と共に保護拘束される。取り調べの中で朴の爆弾入手計画が露見し、刑法73条に触れるとして大審院管轄事件となり、朴と共に死刑判決を受ける。恩赦により無期懲役となるも1926年、金子文子は獄中で縊死を遂げた。

この金子文子が獄中で書いたのが『何が私をこうさせたか』である。判事の「過去の経歴について何か書いて見せる」ということばに従って執筆したという。「『事実の記録』として見、扱って欲しい。」という言葉が示すように、文子が自らの人生を凝視して記録した書である。この手記(自伝)は、これまでの先行研究、山田昭次の「自己の生活史を語る方法で、国家によって死刑にされても自己を放棄できない理由を暗に伝えた」という指摘や、李順愛の「自分が何故天皇に屈服しないかを自問した時、最後の最後に残ったのが、知識などでなく、自らのこれまでの人生そのものであった」という言葉が示す通り、なぜ大逆罪と見做される思想を持つに至ったのか、真摯に己の思想形成過程を追った金子文子の自己探求の書でもある。

金子文子の思想形成過程の検証のためには予審、大審院での尋問調書が必要不可欠である。これに対し、『何が私をこうさせたか』は、これまで尋問調書を補う補助資料として読まれてきた傾向がある。しかし、この獄中手記(自伝)には、尋問調書から読み取れる文子を巡る事実や理路整然とした彼女の思想だけではなく、金子文子の人生における心の弱さ、惑い、醜さも曝け出した部分が存在する。

本研究では、まず、この部分に着目し、この手記を表現の細部にこだわり読むことで立ち現われてくる人間・金子文子の形象化を試みた。そして、文子が自らの弱さ、惑い、醜さ、といった負の部分——それは具体的には性の本能に引きずられ、また、運命を享受してしまう弱さであり、自己をよく見せ取り繕う見栄や虚栄心であった——をどのように克服し、思想を屹立していったのかを明らかにした。その結果は以下である。

##### 【「運命」からの脱却】

金子文子の人生を振り返った時、それは無籍者の悲哀を味わわされた父母の性や運命論、見栄、虚栄心への嫌悪や反発と、そこから脱するための格闘の歴史だったといえるだろう。しかし、敵視したそれらは文子の奥深くにも潜んでいるものであり、文子の人生はその内なる敵を克服する過程でもあった。不条理な現実を生きる中で、性の本能に翻弄されて男のおもちゃにされることから脱し、また、運命論に依らずに主体的に生きようとした文子を明らかにした。

だが、文子が運命論者に共通すると認識した見栄や虚栄心から脱却することは難しかったと言える。爆弾入手計画の発覚により獄中に囚われても尚、その発言にはいわば虚無主義者として

の面子に囚われた部分があったことを指摘した。自らの発言によって窮地に立たされ、苦しむことになった文子はその苦しみから解放されたのは、「私は私自身を生きる」という真の屹立した自我の獲得に依る。獄中にて、「私は私自身を生きる」「人間の絶対平等」という自らの思想を確認した時、文子はこの爆弾入手計画も、その失敗もすべて自らが選んだ道として肯定、受け入れたことを明らかにした。

#### 【山村生活】

『何が私をこうさせたか』の文子が幼少時に暮らした「小林の故郷」の山村描写には、代表的農民文学と目される長塚節の『土』にも描かれなかった、間引きが横行し、耕す「土」を持たない、すべて「物々交換」の法則に支配された山村の人々の極貧生活が描写されていることを明らかにした。そして、この部分の描写には文子の獄中での執筆時の意識が多分に介入していると考えられ、日本の近代化に伴う社会構造「都会と田舎」における地域的経済的格差といった同時代的な矛盾や問題点が示唆されていることを指摘した。また、後に彼女が至り着く資本主義社会が孕む「搾取」の構造摘発への萌芽が認められることも指摘した。

一方で、その山村の自然について、草木を中心とした美の発見ではなく、食生活の栄養素・ビタミンからその価値を認めている点は興味深く、経済的には都会に搾取される極貧の山村に新たな存在意義を発見している点に注目した。

以上によって、『何が私をこうさせたか』の「小林の故郷」に描かれた山村の描写は、全体の約5%弱ほどの分量にすぎないが、文子の思想を理解するうえで決して看過できない部分であることを明らかにした。

#### 【朝鮮体験】

金子文子の朝鮮体験とは具体的には英江での生活ということになる。扶江は京釜線に位置することから京釜線をめぐる日朝両国民の想いの相違、そして、日本人移民の生活実態、文子を引き取った岩下家が営む高利貸しや阿片密売の背景、文子が書き留めた日本人による朝鮮人への笞刑が実際どのように実施されていたかなど、金子文子の生きた時代の朝鮮をできるだけ詳細に追い再現した。そのことにより金子文子の朝鮮時代の意味の重さを再認識することとなった。

そして、文子がかつて無籍者であることを知ったのがこの朝鮮時代であったという点に注視した。日本にいた子供時代、文子は疎外されてきたが、その理由が明らかになり、すべては無籍であったために日本国民として認められなかったことに起因していたのである。

しかし、最も注目すべきことは、文子は朝鮮行を機に得た日本国民としての帰属を喜んではいない、ということである。朝鮮での日本人の現実に触れて、日本帝国に帰属しようとは思わなかったはずだと推察した。朝鮮での生活が苛酷なものとなったのは、無籍者である文子が岩下家の養子として日本国籍に入れられたことが起点となっている。日本帝国の臣民としての生を生きざるを得なくなった時、これまでとは異なる文子の苦しみが始まったのではないか。それは日韓併合後の朝鮮半島の人々の想いと重なるものだったはずである。

文子の朝鮮体験は、日本国家との対峙という、今後の文子の人生を貫く大きな命題を課した。それは日本に併合されながら日本人と同等に扱われない朝鮮の人々と同様のものであったことを明らかにした。

#### 【東京時代】

金子文子の東京時代の苦学の実態を検証した。金子文子は当時の苦学生の典型的な生活を送っていたことを当時の資料より明らかにした。そして、一時期近づいた救世軍の実態とその特色、及び、異性への関心がそこに介在していることから、情緒的なものに流されやすい文子の一面も明らかにした。

しかし、何よりも注目したのは苦学生として生きる文子の意識である。まず、学校を選んだ時の述懐である。文子はほとんど女の生徒のいない正則英語学校と研数学館を選んだ。その理由は女の仲間に入り衣類の競争などに巻き込まれる煩わしさから逃れるため、そして、女ばかりの学校は程度が低く、生徒も教師も学問には熱心でないから進歩が遅いからだとした。同時に次のようにも書いている。

男の学校にはいって男と机を並べて勉強するということは、一方で普通の女より一段と高い才能を持っているような気にもなり、他方では、男と競争しても負けはしないぞといったような男子に対する一種の復讐的な気持ちも加わっていて、自分にもはっきり意識しない虚栄心もそれに手伝っていたのである。

ここから読み取れるのは、文子の中の潜在的な男尊女卑の意識である。文子は、女性は見た目だけを気にする皮相的で軽薄な存在であり、そんな女たちと自分を一緒にされたくない、女性より秀でた男性と対等に学ぶことで自分を認めることが出来ると考えている。ここに透かし見えるのは、文子の中に潜む男性が上位で女性が下位、という意識である。また、男に負けまいとする気持ちを「一種の復讐的な気持ち」と言い換え、叔父でありながら文子の「処女性を破った」叔父の元英をはじめ、これまで文子を抑圧してきた世の中の男たちへの報復の意味を重ねていることを指摘した。そして、そこにも文子は自らの「虚栄心」を重ねているのである。

この「虚栄心」は伊藤との出会いの場でも発動している。苦学生らしき風貌の伊藤を見て、文子は「自分も苦学をしているのだという一種のヴァニティーも手伝って私は急に元気づいた。」とする。つまり、苦学していることが自らを強く大きく見せることに通じているのであり、それは純粋な学問の在り様から外れていると言わねばならない。

実は、先に触れた文子の苦学生活の中で、露天商をしても売れ行きが思わしくなく文子は行商

を試みるが、見も知らぬ他人の家になかなか入っていけない。その際にも「これはまだ虚栄心を取り去り得ないからだ」と考える場面がある。「自分」を「自分」以上に見せようとする心の在り様が問題とされている。この「虚栄心」は仲木砂糖店で女中奉公していた時にも文子の中で発動していたことが書かれていた。過度の労働と睡眠不足の中で、主家に気に入られたいばかりに同僚のおきよさんを出し抜いて早起きをして食事の準備をしたり、仲木砂糖店の息子である仲ちゃんの自尊心を傷つけてまで自分の優越を誇ろうとしたことを懺悔しているのだ。つまり、そこに自分をよく見せようとする見栄を張る「虚栄心」が存在していたことを認めているのである。

しかし、もし絶対的な自我を確立すれば他者を意識して自己を大きく見せる必要はない。そして、この「虚栄心」は否定すべき文子の父を象徴するものであった。軽蔑していたその「虚栄心」が文子の中にも巣くっていたことになる。苦学時代の文子は存在の基準が自己にではなく、まだ他者や社会に在り、それは乗り越えなければならぬ自分自身の姿でもあったのである。こうした文子の「虚栄心」との戦いは『獄中歌集』の次の歌にも表されていることを指摘した。

ヴワニティよ我から去れと求むるは只我あるがままの真実

文子はこの後、「私は私自身を真の満足と自由とを得なければならない」「私は私自身でなければならぬ。」と一歩突き抜けた心境を語る。だが、まだそこに至るまでには、資本主義社会の不条理を解消するものとして期待したにも関わらず幻滅を感じ訣別した社会主義、そして、新山初代、朴烈らを通して至りついた虚無主義との出会いを経なければならない。

#### 【ルソー受容】

金子文子は幼少時、無籍者であることから十分に学校に通うことができなかったが、『何が私をこうさせたか』を読めば文子の読書欲は旺盛で、朝鮮在住時代も『少年世界』や『婦女界』など手にすることができた雑誌や新聞を貪欲に読んでいたことがわかる。また、帰国、上京後、新山初代がベルグソンやスペンサー、ヘーゲルなどの思想一般を、もしくは少なくともその名を知らせてくれたとある。初代を介して得た思想の中でも強い吸引力で文子を導いたのはシュティルナー、アルツィバーセフ、ニイチェなどの虚無思想であったとも書いている。そして、市ヶ谷刑務所に収監された後、真田幸丸の著『信に生きた人』を読んだことや、立松判事あて書状（1925年5月21日付）には、「今、朝飯前の仕事に、二三日差し入れられた、あるロシア作家の論文集を開けてみたら」という言葉もある。そして、石川啄木歌集の差し入れを栗原一男に依頼し、その読後の詠歌を編んだと考えられる文子の獄中歌集には、「石川啄木」「大杉栄の自伝」「ホイットマンの詩集」などの文学者や思想家の名前が散見し、「冬の夜の電燈暗き牢獄にロメオとジュリエットの恋物語読む」という短歌も収録されている。獄中にあっても幅広い視野で様々な分野の書物を読んでいたことがわかる。彼女の旺盛な読書欲、知識欲から推察するに、世界的に反響を呼び、日本においても多くの注目を集めたルソーの『告白』を読んだ可能性、またはその世界に触れた可能性は否定できない。少なくとも、時代的雰囲気として醸成されたルソー熱に金子文子が何かしら感化されていたことは事実であると考えられる。

このように、同時代の様々な知の世界によって形成された金子文子の世界を、醸成された時代の知の体現者として捉え、その諸相のうちジャン＝ジャック・ルソー受容の可能性について検証した。実は『何が私をこうさせたか』中、ジャン＝ジャック・ルソーについて明らかに触れているのは一箇所すぎないが、悪事や性に関する体験の暴露、子どもを独立した存在として扱うべきだという主張と教育制度への批判、再生につながる「自然」の持つ力、過去と執筆時の視点を併存した執筆方法などが相似している点から、ルソー受容の可能性を指摘した。

#### 【シュティルナー受容】

上京後の金子文子にマックス・シュティルナーの与えた影響は思いのほか、大きい。文子が夜学に通っていた頃、友人の新山初代からの勧めもありシュティルナーの思想に触れたと推測されるが、特に獄中の身となってから、再びシュティルナーの影響を受けたことを、文子を読んだと推察される辻潤翻訳の『自我経』の本文と比較検討しながら明らかにした。それはこれまでの彼女の価値観や考え方、生き方そのものを理論づけ、また新たな方向性を示すものであった。

シュティルナーと文子の思想を比較すると、個人と国家の関係に関しては、文子の皮相的なシュティルナー理解も垣間見えるが、自己の発見、そして、自己を中心に据えて生きることなど、シュティルナーは文子の思想の骨格をなしていると言って過言ではない。

特に、「万類の絶滅」を目指した政治テロリズムから、生を肯定し、その生を守るための哲学運動への意識の転換の意味は大きい。そして、獄中に於ける文子の逆罪に対する考えや朴烈に対する意識自体も、自らの意志によらない状態を「犠牲」と称するシュティルナーの思想から照射したものと考えられることを明らかにした。

#### 【アルツィバーセフ受容】

大正期のアルツィバーセフ受容を明らかにしたうえで、アナーキストらの受容が他の文学者たちの関心とは異なる点を指摘した。つまり、性の解放への関心ではなく、宮島資夫「第四階級の文学」にあるように、『労働者セイリオフ』末尾に立ち現れる世界の破壊願望への共感が存在しており、金子文子も後者の1人であることを指摘した。

金子文子は爆発物取締罰則違反と大逆罪によって獄中生活を送る中でもアルツィバーセフの

『作者の感想』を読んでいる。そして、1925年5月21日の立松判事宛ての書状に「あるロシア作家の論文集」からとして次の文章を引用している。

生きることを欲する人間に、生きることを欲しないやうに説教することは滑稽である。人生が直接の満足を与へる人間に向つて、彼には生きる事が極めて不愉快であらうと語る事は滑稽である。

これは『最後の一線』が自殺の宣伝をしているという批評家の意見に対してアルツィパーセフが書いた「自殺の伝染病」という評論の一節である。『最後の一線』の主人公ナウーモフは、人生は苦痛の連続であると認識し、それを断ち切るために自殺を広めていく。このナウーモフを生み出したアルツィパーセフが書いた先の言葉を踏まえて文子は立松判事に次のように書く。

生きることを欲しない人間に、生きることを欲するよう説教することは滑稽である。人生が直接の満足を与えない人間に向つて、彼には生きる事がきわめて愉快であらうと語ることは誠に誠に滑稽である。

「生きること」は「生きることを喜び得る人によってはじめて価値が生じる」。「生きたくない人間」に「生きること」を強いることは「滑稽であり、笑止であり、ありがた迷惑」であるというのだ。これはアルツィパーセフの主張そのものである。そして、更に自殺願望を持って訪ねてきた女性に対するアルツィパーセフの次の言葉を引用している。

人生の事実そのものの中に喜びを見出してゐる者のみが生るべきである。そこに何物をも見ないものは、彼等は實際寧ろ死ぬべきであると。

このようなアルツィパーセフの思想を文子は自らの言葉にして次のように判事に告げる。

生きたい者は生きろ。しこうして死にたい者をして死なしめよ。そこに真の人生がある。ここには徹底した自我意識がある。しかし、その自我は生きることよりも死を志向している。なぜならば、獄中に囚われた文子の生は、文子にとっては自由を束縛された「生きている」とは言い難いものであったに違いないからだ。それは獄中で文子が残した短歌が物語っている。

手足まで不自由なりとも死ぬといふ只意志あらば死は自由なり  
さりながら手足からげて尚死なばそは「俺たちの過失ではない」  
殺しつつなほ責任をのがれんともがく姿ぞ惨めなるかな  
革手錠はた暗室に飯の虫只の一つも嘘は書かねど  
在ることを只在るがままに書きぬるをグズグズぬかす獄の役人  
言はぬのがそんなにお気に召さぬならなぜに事実を消しさらざるや  
狂人を縄でからげて病室にぶち込むことを保護と言ふなり

こうした歌の数々から伺い知ることができるのは、文子の獄中生活に垣間見える官憲の暴力、虐待である。それは文子の自我を傷めつけるものであり、それに忍従することは文子にとって生きるに値しない生の在り方だったのである。そうした生を生きることよりも、自ら命を絶つことで自我を守ろうとしたのが文子ではなかったか。こうした彼女の選択にアルツィパーセフの与えた影響は色濃いと結論付けた。

【金子文子受容 瀬戸内晴美『余白の春』における金子文子の描き方】

瀬戸内晴美の『余白の春』は、関東大震災に伴う朝鮮人虐殺や社会主義者の抹殺など、時代状況の中に金子文子を還元して描いている。そして、金子文子に関する丹念な文献資料の読解の上に、独自の实地踏査を加えて書く方法が特徴的であることを指摘した。そこには「朝鮮」に対する瀬戸内の歴史的関心が感じられる。また、朝鮮の人々と金子文子の思想的な連帯の強さが印象的に描かれている。

ただ、金子の自伝の中で初めて明かされた性体験について触れていないことは問題があることを指摘した。というのも、この経験は自己の意志を無視して結ばれた強制的異性関係であり、それは叔父・元栄との結婚が破談になることに結びつくなど、少なからず、金子文子の男性観や後の朴烈との全く対等な両性の同棲生活の構築、天皇制を否定する人間の絶対平等の思想など、金子の思想形成にも根源的な影響を与えていると思われるからだ。

また、瀬戸内は朴烈への強烈な愛によって金子の末期の思想を解釈している点が特徴的であるが、この愛の過度な強調は、最終的に朴烈を置いて自死を選んだ、つまり、朴烈を超えた金子の屹立した自己の出現、または虚無思想の完成という、金子文子の到達した末期の思想が矮小化される恐れがある。獄死した思想家の激しい恋愛感情という、ある意味、美しくも陳腐なイメージに埋没してしまうことは避けねばならない。瀬戸内晴美が金子文子の死の意味に強い関心を示し、執筆したのがこの『余白の春』であるが、金子文子の末期の思想は、シュティルナーらの虚無思想の受容と血肉化という問題の探究なしには考えることはできないことを指摘した。

【終わりに】

以上が本研究の成果の概略である。この他、金子文子の歌集『獄窓にて』への石川啄木の影響、韓国のキム・ピョラの『常盤の木 金子文子と朴烈の愛』や映画『朴烈』の日韓の受容比較、藤森成吉の傾向映画『何が彼女をさうさせたか』への金子文子の影響の検討なども行った。また、聞慶の朴烈・金子文子記念館より獄中の朴烈の書簡データの提供があり、その解読も行った。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 7件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 安元隆子	4. 巻 9
2. 論文標題 金子文子のアルツィパーシェフ受容	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 "Issues of Japanology No.9 St.-Petersburg State Univ. "	6. 最初と最後の頁 667-674
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 安元隆子	4. 巻 40
2. 論文標題 金子文子の形象化をめぐる 瀬戸内晴美『余白の春』論	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『日本大学国際関係学部研究年報』	6. 最初と最後の頁 11-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 安元隆子	4. 巻 9
2. 論文標題 金子文子のアルツィパーシェフ受容	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 "Issues of Japanology No.9 St.-Petersburg State Univ. "	6. 最初と最後の頁 667-674
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 安元隆子	4. 巻 42巻
2. 論文標題 金子文子のマックス・シュティルナー受容	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『国際関係研究』	6. 最初と最後の頁 61-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 安元隆子	4. 巻 41
2. 論文標題 金子文子の朝鮮時代 戸籍を得たことで知った日本と朝鮮	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際関係学部研究年報	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 安元隆子	4. 巻 41
2. 論文標題 金子文子 「運命」からの脱却	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 国際関係研究	6. 最初と最後の頁 51-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 安元隆子	4. 巻 40巻2号
2. 論文標題 金子安見子 『何が私をこうさせたか』のルソー受容の可能性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国際関係研究	6. 最初と最後の頁 15-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件(うち招待講演 0件/うち国際学会 3件)

1. 発表者名 安元隆子
2. 発表標題 金子文子のアルツィパーシェフ受容
3. 学会等名 国立サンクトペテルブルグ大学日本研究学会(サンクトペテルブルグ大学東洋大学 オンラインで実施)(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 安元隆子
2. 発表標題 金子文子『何が私をこうさせたか』のルソー受容の可能性
3. 学会等名 日本比較文学会 東京支部大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安元隆子
2. 発表標題 「運命」からの脱却 金子文子『何が私をこうさせたか』を読む-
3. 学会等名 日本大学国際関係学部 北京大学国際関係学院 シンポジウム(於: 北京大学)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安元隆子
2. 発表標題 金子文子のアルツィパーセフ受容
3. 学会等名 国立サンクトペテルブルグ大学日本研究学会(オンラインで実施)(国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 安元隆子
2. 発表標題 金子文子のルソー受容の研究
3. 学会等名 比較文学会東京支部大会
4. 発表年 2019年



〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------